

# (実践報告) 大学における日本学の現在

## —和歌山大学での実践と関連させて—

### Faculty of Japanese Studies at Universities : In Relation to the Japanese Studies Program at Wakayama University

安本 博司

Hiroshi YASUMOTO

和歌山大学日本学教育研究センター

#### Abstract

The purpose of this paper is to clarify the reasons for the increase in the number of Japanese Studies Program at Japanese University. As a result, it was found that the number of faculties of Global Japanese Studies has been increasing due to the addition of the word " global," which creates a new value different from that of conventional Japanese Studies, and also due to the demand for global human resource development. This paper also describes the Japanese Studies Program at Wakayama University and the content of the Introduction to Japanese Studies class.

キーワード/Keywords 日本学、共生、グローバル人材、Japanese studies, symbiosis, global human resources

#### 1. はじめに

日本学に対する批判や限界は、日本学を有する大学の WEB サイトから知ることができる。「従来の日本学研究は、日本においては、日本語による日本の視点での国内研究という限界が、また、欧米においては、英語中心による欧米の視点での日本の地域研究・日本語研究という限界があった。」こと、また「人文科学の研究者のあいだで、『紛争解決』や『持続可能性(サステナビリティ)』といった現代社会の課題を各自の研究領域の課題としてどのように引き受けるのか、という問題意識が確立されていない(中略)こうした反省に立ち、日本学国際共同大学院では、個々の学問領域を守り、その領域を深掘りする伝統的なあり方ではなく、分野や時代・地域を横断する横の関係の発見に軸足を置く。」(東北大学 日本学国際共同大学院 WEB サイト)と、従来の反省から新たな研究の方向性が示されている。他方、新たな視点に基づく教育を展開している大学もある。例えば大阪大学では「これまでの日本研究では、日本の固有性や特異性がことさらに強調され、その特異性は、日本が近代化する過程

和歌山大学教育機構教養教育部門『教養教育研究』第1巻 2024年3月 実践報告 安本博司 104-112  
で欧米やアジアとの対比において自己言及的に構築されてきたひとつの言説にすぎなかったという自覚に立って、一国的な研究枠組を踏み越えていくこと」(大阪大学大学院人文学研究科/文学部現代日本学研究室 WEB サイト)、そして、「日本学専修は、日本を自明なものとして捉えるのではなく、歴史学、民俗学、人類学、文化研究、ジェンダー、セクシュアリティ研究、表象分析といった多様な方法と視点から日本にアプローチすること」(大阪大学大学院文学研究科・文学部 WEB サイト)と、日本そのものを本質的に捉えないで、多様な視点から日本理解を目指すことを明確にしている。両大学の日本学は、従来の日本研究とは異なる、日本学に新しい価値を創り出していこうとする共通点がある。両大学において「日本学」とは何か、という新たな定義、価値を創造するための過渡期であるように考えられる。また、後述「2」で示す他大学での「国際日本学」の創設の背景にも、前述の両大学と同じように、新しい価値を創造していこうとする姿勢がうかがえる。

日本の大学に「日本学」という学部、学科は非常に少ない。また「日本学」と付けたものの多くは「国際」を付け、「国際日本学」という名称を使用している。その理由は、前述の反省(東北大学 日本学国際共同大学院 WEB サイト)に基づき、日本学研究を進めていくうえでの新しい価値を創り上げていこうとする姿勢や、従来の日本学と差別化する意図があるからだろう。そこに見える共通のキーワードは、「国際」に関わるものとして、「グローバル」「(異なる文化的背景をもつ)他者との協働」「(国内外の)課題解決」「共生」、文化の自明視を避けるためのものとして、「文化の捉えなおし」「海外日本研究の知見」などが挙げられる。また、他大学の「国際」のような冠をつけた大学は、日本学をどのように捉え、実践しているのだろうか。それらを分析することは、今後の日本学の方向性や発展の可能性に寄与するものと思われる。本稿ではまた、筆者が所属する和歌山大学の「わかやま日本学副専攻プログラム」の必修科目である「日本学概論」とも関連させ、「日本学概論」の実践について報告する。

## 2. 日本学の現在—日本学と名称のつく学部・学科

筒井琢磨(2012)は、日本研究のタイプを、通時的に「ジャパノロジー型研究」(対象は近代以前、扱うテーマは人文学的題材)、「日本型研究」(対象は近代、扱うテーマは社会科学的題材)、「現代型研究」(対象は現代、扱うテーマは社会問題)に分類している。後述の「4」で紹介する「日本学概論」は、主に日本社会のマイノリティに関わる課題を取り上げており、近代以前を対象にしてきた「ジャパノロジー型研究」ではなく、また近代を対象とした「日本型研究」でもない。社会問題を扱った「現代型研究」をベースにした内容だと言える。「表1」に示した日本学で提供する科目にも「現代型」が多く含まれていることがわかる。「表1」の大学は、インターネットで「大学日本学」と入力しヒットしたものを中心に抽出した。したがって、すべてを網羅しているわけではないが「日本学部」という学部名で完全一致したものはほとんどない。その多くが「国際日本学」のように「国際」を付けているところが非常に多い。「表1」には学部、学科、専攻において、「日本」と付く学部や学科等のある大学を挙げ、設置年も合わせて記載し、把握可能な範囲で分野やコース名、科目名を記している。

表1 「日本学」を有する大学(2023年8月時点)抜粋

	大学名	学部名・プログラム名(設置年)	学科名(設置年)	分野、コース *科目名一部記載
(1)	東京外国語大学	国際日本学部(2019)	国際日本学科	【日本社会分野】【日本文学・文化分野】【日本語学分野】【日本語教育分野】 「多文化コラボレーション」「社会発信型プロジェクトワーク」「多文化社会論」 「教育支援フィールドワーク」
(2)	明治大学	国際日本学部(2008) 国際日本学研究科(2012)	国際日本学部	【ポップカルチャー研究領域】【社会システム・メディア研究領域】【グローバル共生社会 研究領域】【国際文化・思想研究領域】【日本文化・思想研究領域】【日本語研究領域】 【英語研究領域】【総合教育科目】【外国語科目、日本語科目(留学生対象)】
(3)	神奈川大学	国際日本学部(2020)	国際文化交流学科 日本文化学科 歴史民俗学科	【国際文化交流学科】「多文化共生論」「比較文化論」「現代国際関係論」 【観光文化コース】「観光文化論」「観光交流論」 【ことば・メディアコース】「メディア・リテラシー」「ことばと文化」「ことばと社会」 【国際日本学コース】「オリエンタリズム論」「国際日本文化論(文化受容)」
(4)	大手前大学	国際日本学部(2022年改組) *総合文化学部より名称変更	国際日本学科	【歴史】【文化】【文学】【言語】関連科目
(5)	関西外国語大学	外国語学部	国際日本学科(2024予定)	【日本と地域文化に関する科目群】【日本と国際社会に関する科目群】 【言語に関する科目群】【日本語教育に関する科目群】【教養とキャリアに関する科目群】
(6)	帝京大学	外国語学部 *2022年外国語学部にて国際日本学科設置	国際日本学科	国際日本学入門科目:「日本の文化」「日本の経済と経営」「日本の法と政治」 「日本近現代史」「日本の社会」「世界の日本研究」「世界の日本語教育」
(7)	名古屋外国語大学	世界教養学部(2019) *外国語学部⇒世界教養学部国際日本学科改組	国際日本学科(2019)	【国際日本文化コース】【国際日本発信コース】 「異文化間コミュニケーション」「日本伝統文化」「日本理解の方法」「世界理解の方法」
(8)	四天王寺大学	人文社会学部⇒文学部(2024予定)	日本学科(2012) *2024年日本学科と国際 コミュニケーション学科	【日本語・日本文学】【国語教育・日本語教育】【伝統文化・観光】【現代文化】 「講読Ⅰ(日本語学)」「日本文学論Ⅰ(近現代)」「日本語教育論」「現代メディア論」 「サブカルチャー論」
(9)	追手門学院大学	国際教養学部 ⇒国際学部と文学部に改組(2022)	国際日本学科2017年改称 ⇒2022年改組にともなっ て名称消滅	【クールジャパン学コース】「アニメ文化論」「韓国から見た日本」 【笑い学コース】「落語の世界」「漫才の世界」「大阪の文学」 【日本学コース】「日本学基礎」「アジアの中の日本」「日本の魅力発信フィールドワー ク」*2022年の改組により、上記コースは消滅
(10)	新潟大学	経済科学部 *2020年経済学⇒経済科学部	学際日本学プログラム	【知識・理解科目】(学部共通基礎科目)「経済学入門」「日本経済入門」 【専門科目】(プログラム基礎科目/中核科目、その他専門科目)「文化社会論基礎」 「ジェンダー論」「新潟地域文化論」
(11)	創価大学	文学部	国際日本学メジャー (2023年)	イントロダクトリー:「国際日本学への招待」 ベーシック/アドバンス:人文系、社会・文化系、言語系、文学系
(12)	麗澤大学	国際学部(2020)	国際学科	日本学・国際コミュニケーション(JIC)専攻「共生のための日本語論」「国際日本学入門」
(13)	和歌山大学	【わかやま日本学副専攻プログラム】(2023)	日本学教育研究センター (2022)	具体的な学修項目 ①コミュニケーション能力、②理解と表現、③俯瞰的な視野 【語学】【日本文化関連】【国際連携関連】の分野から科目選択
(14)	千葉大学	Global Education 副専攻プログラム(2013)	国際日本学	主に普遍教育科目と専門教育科目の中から、国際日本学の主旨に合致した科目を対象科目に 指定。国際日本学は、「国際日本科目」「英語」「留学」の3区分から構成

## 3. 調査概要と分析

本章では、「日本学」を有する大学について、その大学の WEB サイトに掲載されている概要、特色、教育方針や目的などの文言から分析をおこなった。その結果、「世界の中の日本」という位置づけ(=国際的な視点) (表 2)、「世界へ発信するための日本理解」(表 3)、「課題解決能力の育成、そのための共修(=異文化理解)」(表 4)に概ね整理・分類することができる。表 2～表 4 中の(1)(2)等は、表 1 の大学名の番号である。

表 2 世界の中の日本という位置づけ(=国際的な視点)

世界の中の日本という位置づけ(=国際的な視点)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本そのものをフィールドとして分野を超え、多角的な視点で日本を捉え直します。<b>私たちが暮らす日本という国を、世界の中に位置付けて学ぶのが国際日本学部</b>(1)</li> <li>・「<b>世界の中の日本</b>」という視点に立って主体的に世界に価値ある情報を発信できる人材を育成します(2)</li> <li>・「<b>世界の中の日本</b>」を<b>自覚</b>し、積極的に世界に価値ある情報を発信できる国際人を育成していく(2)</li> <li>・「歴史」「文化」「文学」「言語」を<b>グローバルな観点から掘り下げ—日本社会のあり方</b>を再構築する知見を身につける(4)</li> <li>・「<b>世界の中の日本</b>」という視点から、日本に関する深い知識、他の国や地域との比較・交流、国際的課題に対する日本の役割を学ぶ学際的学問(6)</li> <li>・<b>異文化への理解から日本を捉える複眼的な視点</b>を養います(8)</li> <li>・<b>グローバルな視点</b>から日本をめぐる問題を理解するために、外国語の学修を重視(10)</li> <li>・<b>世界の中に「日本」を位置づけ</b>、地理的・歴史的特徴をふまえながら、その変遷をたどります(11)</li> <li>・「わかやま日本学プログラム」を通して学修・体験したことを<b>国際的な視点</b>や母国の視点から位置づける(13)</li> </ul>

表 3 世界へ発信するための日本理解

日本理解と日本の発信(=言語運用能力重視)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界から注目される、<b>日本の文化と社会構造に対する深い理解</b>と、実践的な<b>英語教育・日本語教育による優れた発信能力</b>(2)</li> <li>・<b>歴史・文化・文学・言語を横断的に学び(=日本理解)</b>、専門力を深める(4)</li> <li>・<b>日本の誇るべき文化や技術を世界に発信</b>(5) / <b>日本の「すごい」を世界に発信</b>する(5)</li> <li>・<b>英語と日本語をコミュニケーション・ツールとして修得し日本を世界へ発信</b>する能力(6)</li> <li>・グローバル共生社会の抱える課題や世界における<b>日本について学び探求(=日本理解)</b>し、<b>発信する能力</b>(6)</li> <li>・日本を立脚点として、<b>日本と世界を複眼的に学び(=日本理解)</b>、<b>日本の魅力を世界に発信</b>できる人材を育成(7)</li> <li>・古今東西の<b>日本文化を幅広く学び、国際的な視点から日本への理解を深め</b>、学びの集大成として<b>その魅力を世界に発信</b>(9)</li> <li>・(異なる境遇や価値観の人々との協働を通して)現代日本の課題を見つめなおし、<b>積極的に情報発信</b>(10)</li> <li>・「<b>日本</b>」を<b>複眼的に分析し、理解する</b>方法を学びます(10)</li> <li>・「<b>日本</b>」の<b>社会・文化・歴史・言語を深く学び、「日本」というコンテンツを世界に発信</b>(11)</li> <li>・「日本」を知り、「日本」を学び、「日本」を理解し、「日本」を発信するために必要な4系統の学問領域—①人文系・②社会・文化系・③言語系・④文学系の科目群を設置(11)</li> <li>・<b>英語と日本語の両方で高度な運用技術を習得し、「自分たち」を積極的に発信する力</b>を身につけます(12)</li> <li>・学びと体験を通して、日本語とその背景にある日本文化を統合した日本学を修め、<b>日本文化への深い理解力</b>を培う(13)</li> <li>・紀伊半島を中心とした<b>日本文化体験を通して、和歌山への深い理解力を培い、日本文化、日本社会への関心を高め、国内外の人々にその学びを発信</b>することができる(13)</li> </ul>

表 4 課題解決能力の育成、そのための共修(=異文化理解)

課題解決能力の育成、そのための共修(異文化理解)=内なる国際化の推進
<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題解決型の授業に取り組むことで、<b>異なる背景を持った人々と議論しながら共通の課題に取り組む姿勢</b>を養います(1)</li> <li>・<b>さまざまな文化的背景をもつ世界諸地域の人々と協働して地球的課題に取り組む</b>ことができる人材を養成すること(1)</li> <li>・「<b>文化交流—多文化共生—コミュニケーション</b>」をキーワードに、深い専門性と幅広い教養を兼ね備えた、世界と日本、地域を結ぶ架け橋となる人を育てていきます(3)</li> <li>・<b>グローバル共生社会が直面する課題に取り組む能力</b>を身につけます(6)</li> <li>・日本はこれから、<b>国内の多文化共生や少子高齢化(=課題)</b>がますます進み、新たな時代を迎えていきます。そして、その時代を乗り越えていくためには、世界の知見を日本に持ち帰れるグローバルな人材を世界に送り出すとともに、多くの外国人を日本へ呼び込むといった流動的でダイナミックなプロセスが日本には必要(7)</li> <li>・<b>主体的に課題を発見し解決する意欲を有し、多様な価値観に基づく調和的で豊かな人間性</b>を持った人材を育成します(8)</li> <li>・留学生との対話を積極的にカリキュラムに取り入れ、<b>異なる境遇や価値観の人々との協働</b>を通して、<b>現代日本の課題</b>を見つめなおし、積極的に情報発信する姿勢を身につけることができます(10)</li> <li>・<b>他の文化の人々と共に共生すべきか</b>、自身に何が貢献できるか、「日本」の独自性をどこに見出すべきかについて、自身の関心の高いテーマを選び、幅広い観点から研究(11)</li> <li>・クラスの約3人に1人が留学生という環境で、単なる知識ではなく、<b>日常的に多文化共生を体験</b>。改めて「日本(自分たち)」を知り、日本語運用力や日本の文化・社会などを見つめ直した上で多文化共生の道を探ります(12)</li> <li>・<b>多種多様な人々との交流・協働の経験を通じて異文化を理解</b>する能力及び実践力を身につける(13)</li> <li>・<b>様々な国の学生と共に日本学を学ぶことで、日本及び世界の諸課題をグローバルな課題の中に位置づけながら、理解、表現する能力を涵養</b>する(13)</li> <li>・世界の中で日本はどのような存在なのか、<b>環境・紛争などグローバルに広がる諸問題</b>をどのように考えるのか、<b>異なる文化や考えを持つ他者とどのように協力</b>していくのかなど、国際化する社会で生きていくために基礎となる考え方を学びます(14)</li> </ul>

以上の分析からわかることは、現在、日本研究が目指すものには、①国際的な視点で世界の中に日本を位置づけ、それを土台に、②日本理解(=日本を知る)と日本の魅力や良さの発信(=言語運用能力重視)が重視され、さらに③(グローバルな諸課題に対する)課題解決能力の育成、そのための共修(異文化理解)が重視されていると捉えられる。

#### 4. わかやま日本学副専攻プログラムの概要

##### 4.1 プログラムの内容と目標

和歌山大学の「わかやま日本学副専攻プログラム」は、2023年度よりスタートしたばかりのプログラムである。わかやま日本学副専攻プログラムでは、入り口を「日本学概論(必修)」(1、2年生で履修)、出口を「日本学特論(選択必修)」(3、4年生で履修)と位置づけ、その間に、「日本文化関連」科目(「日本事情」「世界の中の日本語」「外国語として学ぶ日本語」「民族芸能論」「わかやまを学ぶ」など)、「語学関連」科目(「日本語」「英語」等の初修外国語)、「国際連携関連」科目(「国際開発論」「国際協力論」「グローバル社会論」など)が設けられ、国際的な視点から日本を学べるようになっていく。また、「日本学演習(選択必修)」では、座学で学んだ内容も含めて、フィールドワークによる主体的な学びを通して、日本理解を深めることを意図している。学部として設置されている他大学の国際日本学部と比べ、選択できる科目や内容は必ずしも十分とは言えない。しかしながら、「〇〇日本学」、特に国際日本学部を有する他の大学とは、異文化理解、多文化共生、日本文化発信に必要な言語能力の育成など、問題意識は、次の目標からも共有されていると言える。

日本学の副専攻プログラムの目標は、「日本文化が集積する和歌山の地に根付く知恵や知識の学びと体験を通して、日本語とその背景にある日本文化を統合した日本学を修め、日本文化への深い理解力を培う。様々な国の学生と共に日本学を学ぶことで、日本及び世界の諸課題をグローバルな課題の中に位置づけながら、理解、表現する能力を涵養する。」ことを挙げている。また、具体的な学修目標は次の通りである。(1)＜コミュニケーション能力＞では、日本語または英語・初修外国語科目を履修し、コミュニケーションの基礎的な力を身につけること。(2)＜理解と表現＞では、紀伊半島を中心とした日本文化体験を通して、和歌山への深い理解力を培い、日本文化、日本社会への関心を高め、国内外の人々にその学びを発信することができること。(3)＜俯瞰的な視野＞では、「わかやま日本学副専攻」を通して学修・体験したことを国際的な視点や母国の視点から位置づけるとともに、多種多様な人々との交流・協働の経験を通じて異文化を理解する能力及び実践力を身につけること、の3つを挙げている。

以上の内容は、他大学の国際日本学の概要、目的などから導き出されたキーワード、「国際」に関わる「グローバル」「(異なる文化的背景をもつ)他者との協働」「(国内外の)課題解決」「共生」とも重なるところが非常に大きい。そういう意味では、わかやま日本学副専攻プログラムも国際日本学に通じるものがあるが、ここに「わかやま」と名付けたところに独自性がある。これは、「わかやま」での学びや、そこで見えてきた課題が、グローバルな課題や、世界の諸課題につながっていることへの気づき、理解を目指していることにある。こ

和歌山大学教育機構教養教育部門『教養教育研究』第1巻 2024年3月 実践報告 安本博司 104-112  
 の「グローバル」から「グローバル」へという視点は、クリストファー・グレイグ(2022)が  
 ローカルな地域研究がいくつかの点で世界につながっていることを、歴史研究を通して示し  
 たことと重なる。また、地域研究を、地域内で完結するのではなく、グローバルな視点、課  
 題の中に位置づけていくという本学の日本学が目指す方向性と重なるものでもある。次に筆  
 者担当の「日本学概論」について紹介する

#### 4.2 わかやま日本学副専攻における「日本学概論」

筆者が担当する「日本学概論(必修)」を例に挙げると、「共生」「人権」「偏見への気づき」  
 を軸として授業を展開している。「表5」は、「日本学概論」の内容等を記したものである。  
 授業ごとに目標を設定し、各回の目標を授業の冒頭で学生に伝え授業をおこなった

表5 日本学概論の授業

回	主題	授業内容	目標
1	日本学とは何か？ 共生とは？	・従来の日本学とそれへの批判 ・本学・各大学の日本学の概要、目的 ・キーワード：共生、偏見への気づき、 人権についての概念	・プログラム/科目概要の理解 ・日本学への理解 ・本科目の重要概念の理解
2	日本人移民の歴史 日本・和歌山から海外へ 海外から日本へ	・日本人移民の歴史 ・日本からの移民と移民の多様性 ・海外からの移民者とその歴史	・日本人移民を通して、地域に居住する 外国人への理解を深める ・移民の抱える問題への理解 ・移民問題をグローバル的な、現代的な 課題として理解
3	日本社会の マイノリティ①	・ミニワーク(日本人とは？) ・アイヌの文化・歴史 ・アイヌの人権問題 ・在日コリアンの歴史、文化、教育 ・マイクロアグレッション	・「日本人」とは何かを通して個々の判 断基準を相対化 ・アイヌ、在日コリアンの課題を歴史と 関連させ理解できる ・言語使用における偏見への気づき
4	多文化共生社会を担う 人々たち	・ゲストスピーカー(在日3世) テーマ：多文化共生社会を作るために 大切なこと	・当時者の語を通してマイノリティ問 題について深く考えられる ・多文化共生を、身近にある現存の課題 として具体的に考えられる
5	沖縄の抱える課題	・沖縄の歴史 ・沖縄の文化(ハジチ、エイサー)	・沖縄の歴史を通して、現存の諸課題を 理解できる ・沖縄文化を通して日本の中の多様性を 再認識できる
6	日本社会の多言語・ 多文化状況	・身近にある多言語表記 ・多言語景観から見る日本社会の変化 ・外国人増加の背景 ・和歌山や本学での取り組み ・情報格差の問題	・身近にある多言語表記への気づきと、 その背景への理解 ・「定住者」などの在留資格が創設され た背景への理解 ・やさしい日本語が生まれた背景を知る
7	日本の教育課題	・日本の外国人児童生徒の現状/課題 ・日本の中の外国人学校 ・国・自治体の取り組み	・外国人児童生徒増加の背景と、学校現 場での課題への理解 ・自治体の対策を知る ・外国人学校の法的位置づけの理解 ・アイデンティティの重要性の理解
8	日本の労働問題	・国内の外国人労働者 ・外国人労働者の抱える問題 ・外国人労働者の受入れ ・コロナ禍における外国人労働者 ・外国人労働者に対する支援	・外国人労働者増加の背景への理解 ・技能実習生制度と特定技能制度の理解 と制度上の問題点を知る ・在留資格の種別、活動の制限などに ついて理解できる
9	多文化共生社会を担う人 々たち	・ゲストスピーカーの「Minami こども教室」での支援内容の紹介	・実際に支援活動をおこなっている ゲストから話を聞き、これまで授 業で取り上げた、教育問題を関連 させ理解を深める
10	多文化共生社会を阻む 人権問題	・ヘイトスピーチとは ・日本ヘイトスピーチ ・表現の自由とヘイトスピーチ規制 ・国内外のヘイトスピーチの取り組み ・ヘイトスピーチの害悪	・ヘイトスピーチ解消法ができるまでの 経緯、議論からヘイトスピーチの規制 の背景を理解 ・ヘイトスピーチの被害について知る ・ヘイトスピーチ解消法の理解
11	各国の多文化共生に 関わる課題と対策	・日韓外国人労働者受入れ政策 ・韓国の多文化家族支援政策 ・カナダの多文化主義政策 ・日本の多文化共生政策	・各国の外国人政策を理解し、日本の 政策と比較しながら、共通点、相違 点を理解する
12	日本文化にみる大陸 文化の影響	・ゲストスピーカーの活動や地域に存 在する朝鮮文化に焦点を当て、日本 文化と朝鮮文化の歴史について講義	・渡来文化が日本文化に影響を与えて いることを知り、日本文化を自明視し ない視点をもつ
13	日本社会のマイノリティ	・障害者とは ・日本の障害者施策の特徴 ・障害を理由とした人権侵害 ・人権侵害を防ぐために ・内なる優性思想	・国内の障害者政策への理解 ・優勢思想という観点から個人に内在 する優勢思想への気づき ・自らの社会化の過程を見直す
14	日本社会のマイノリティ	・セクシャル・マイノリティとは ・性的指向と性自認 ・セクシャル・マイノリティの 歴史 ・国内外の制度 ・人権侵害例	・LGBT、性的指向、性自認等、基本 的な用語を理解 ・データからLGBTの置かれた状 況の理解 ・各国のLGBTに関わる諸制度を知る ・個を認めることの理解
15	ドキュメンタリー映画	・当事者主演の映画視聴	・当事者の体験を通して、性的マイノ リティの葛藤、置かれた状況への理解



和歌山大学教育機構教養教育部門『教養教育研究』第1巻 2024年3月 実践報告 安本博司 104-112

「表5」に見られるように、講義内容は、①「多文化共生関連(2/3/4/6/7/8/9/10/11/12回)」、②「(外国人を除く)マイノリティ関連(3/5/13/14/15回)」、③「文化関連(3/5/12回)」のテーマに分けられる。ただし、①「3」(先住民族アイヌ/在日コリアン)では、共生に関わる人権問題だけではなく、文化的側面も取りあげていることから、③と重複し、②「5」(沖縄の関わる課題)に関しても、沖縄の「ハジチ文化」を取り上げていることから③とも重複する。以上のように、①②③は個別のものもあれば、互いに関連しているものもある。また①②③は「教育社会学」「労働関連」「言語学」「歴史学」「社会学」「民俗学」などを参考にし、それら分野の知見なども取り入れながら授業をおこなった。

## 5. 考察と結果：グローバル人材育成という観点

グローバル人材育成推進会議(2012)では、グローバル人材には、次の要素が必要だと明記している。その要素とは、「要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力」、「要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感」、「要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」である。このほか、幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークと(異質な者の集団をまとめる)リーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー等の要素が必要だとし、日本人学生の海外留学など、在外経験を重視している。その一方で、経済的な理由など様々な事情で留学できない人の人材育成についても考えられている。グローバル人材推進会議(2012)では、外国人留学生の受け入れ、優秀な留学生と日本人学生との交流の推進の必要性が指摘され、「内なる国際化」の促進が明記されている。他方、西村・趙(2022)は、大学におけるグローバル人材育成とは「現代社会の課題、一国では解決できない共通問題に対応できる若者の育成を進めることに他ならない」として、グローバルな課題解決のためには大学での「内なる国際化」が必要であることを述べている。

現在の日本学は、これまでの批判に対しての応えが、グローバル人材育成という社会的要請「外なる国際化」「内なる国際化」(新しい価値)への応えとしても有効であったことも相まって、その新しい価値を取り込み、国際日本学という形で立ち現れたと言えるのではないだろうか。このことは、グローバル人材推進会議(2012)以降、設置された各大学の学部、学科、プログラムの設置年(表1参照)からも推察できる。

## 6. おわりに

本稿では、現在の日本学についての方向性や、また主に国際日本学(学部、学科など)増加の要因と本学「日本学概論」の実践について報告をおこなった。国際日本学などに見られる日本学の増加要因については、共時的に各大学のHPに記述されている文言を分析したに過ぎず、十分な説得力を示せているとは言えない。また、通時的に「日本学」というものが各大学において、どのように位置づけられ、変化してきたのか。あるいは、グローバル人材育成が日本学以外の名称、プログラムとして展開されているのか、それらの観点からの分析もできていない。これらは今後の課題としたい。

「日本学概論」については、日本学研究の「現代型研究」の対象の範囲であり、特に他大学にもある「多文化共生論」と類似するところが多い。この科目の特徴として、「共生」をキーワードに据えることによって、障がい、性的マイノリティの問題を授業で扱うことが可能になっている。さらに、「わかやま」に着目することで、グローバルな問題が日本の諸課題とも重なり、グローバルな課題でもあることへの気づきを促すことができたのではないだろうか。このような特長を有しながらも、わかやま日本学副専攻プログラムもまた、現在の社会的要請「内なる国際化」「外なる国際化」に応えるためのプログラムであり、その点で他大学の日本学が目指すものと大きな違いはない。課題としては、日本学概論での実践が「わかやま日本学プログラム」の目標を達成する上で、どれだけ貢献できたのか、ということまでは分析できなかったことが挙げられる。今後はアンケートなどを実施し、分析していきたい。

付記 本稿は2023年8月25日 韓国日本学会第106回国際学術大会発表原稿に修正、加筆したものである。

#### 参考文献

青木保(2013)『日本文化論の変容—戦後日本の文化とアイデンティティ』、中公文庫。

大阪大学大学院人文学研究科/文学部現代日本学研究室

<http://japanese-studies.jp/> (2023年8月1日閲覧)。

大阪大学大学院文学研究科・文学部

<https://www.let.osaka-u.ac.jp/ja/academics/undergraduate-course/f-nihongaku> (2023年8月1日閲覧)。

追手門学院大学 国際日本学科

<https://nyushi.otemon.ac.jp/education/international/japan/index.html> (2023年8月1日閲覧)。

大手前大学 国際日本学部

<https://www.otemae.ac.jp/special/ijs/learning/> (2023年8月10日閲覧)。

神奈川大学 国際日本学部 <https://www.ccj.kanagawa-u.ac.jp/> (2023年8月6日閲覧)。

関西外国語大学 国際日本学科

<https://www.kansaigaidai.ac.jp/academics/cfs/sjsgc/> (2023年8月6日閲覧)。

金容儀(2019)「韓国における大学の『日本研究所』の現状と課題」、『世界の日本研究』、41-51。

グローバル人材育成推進会議 (2012)「グローバル人材育成戦略(案)の概要」

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/052/052\\_02/siryou/\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/30/1327449\\_07.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/052/052_02/siryou/_icsFiles/afieldfile/2012/10/30/1327449_07.pdf) (2023年8月1日閲覧)。

四天王寺大学 日本学科

<https://www.shitennoji.ac.jp/ibu/guide/department/nihon.html> (2023年8月10日閲覧)。

創価大学 国際日本学メジャー



和歌山大学教育機構教養教育部門『教養教育研究』第1巻 2024年3月 実践報告 安本博司 104-112  
<https://www.soka.ac.jp/letters/2023curriculum/international/> (2023年8月10日閲覧).

竹本幹夫(2021)「日本文学研究と日本学」、『学術の動向』26巻4号, 57-61.  
千葉大学 国際日本学  
<https://global-education.chiba-u.jp/course/> (2023年8月10日閲覧).

筒井琢磨(2012)「日本学を巡る論点の試行的整理ー国際日本文化研究センター設立時の議論を手がかりにー」、『日本学論叢』第2号, 209-216.

帝京大学 国際学科 <https://www.teikyo-u.ac.jp/gjs/top.html> (2023年8月10日閲覧).

東京外国語大学 国際日本学部  
<https://www.tufs.ac.jp/education/js/> (2023年8月6日閲覧).

東北大学 日本学国際共同大学院  
<https://gpjs.tohoku.ac.jp/about/summary/> (2023年8月10日閲覧).

名古屋外国語大学 国際日本学科  
<https://www.kokusainihon.nufs.ac.jp/> (2023年8月10日閲覧).

新潟大学 学際日本学プログラム  
<https://www.econ.niigata-u.ac.jp/program/japanese/> (2023年8月10日閲覧).

西村政子・趙彩尹(2022)「日本の大学におけるグローバル人材育成の現状と課題」、『教育経済学研究』vol 1, 12-25.

クリストファー・クレイグ (2022)「日本学のための歴史学的手法とその実践」、『日本学の教科書』(伴野文亮・茂木謙之介編)、文学通信.

明治大学 国際日本学部  
<https://www.meiji.ac.jp/nippon/about/outline.html> (2023年8月6日閲覧).

麗澤大学 日本学・国際コミュニケーション専攻  
<https://www.reitaku-u.ac.jp/faculty/global/communication/> (2023年8月10日閲覧).

和歌山大学 わかやま日本学副専攻プログラム  
<https://www.wakayama-u.ac.jp/cjs/fukusenko.html> (2023年8月10日閲覧).